

# パラグアイ総選挙結果及び今後の見通し

鈴木 咲央里（在パラグアイ大使館 三等書記官）

本年（2023年）4月30日、5年に1度のパラグアイ総選挙が実施された。同選挙では、次期政権を担う大統領・副大統領に加え、上院議員、下院議員、県知事、県議会議員が選出され、パラグアイ政治は新たな局面を迎えることとなる。本稿では、4月30日に行われた総選挙の結果を振り返りつつ、8月15日に成立するペニャ新政権の見通しについて考察する。

## パラグアイ大統領選挙

パラグアイの政治は、他のラテンアメリカ（中南米）地域諸国との比較で「安定」という言葉で形容される。アブド現大統領も所属するコロラド党は、長期にわたりパラグアイの与党を務めており、2008～2013年のルゴ政権（注：ルゴ大統領は2012年に弾劾され、以降はフランコ副大統領が大統領を務めた）を除いて、約70年間にわたり政権与党として大統領を輩出してきた。今回の大統領選挙においても、コロラド党から擁立されたペニャ候補（元財務大臣）が勝利を取めた。

下記に詳述するように、結果のみ見れば、今回の総選挙でもコロラド党がゆるぎない強さを見せたとも捉えられるが、本稿ではその結果の裏にあった背景を分析するとともに、新政権成立後のパラグアイ政治・経済の展望についても考察していきたい。

大統領は再選が禁じられている。今回の大統領選挙の争点としては、前政権で大統領を務めたカルテス前大統領派と現政権のアブド派間のコロラド党内での争い、また、政権交代が実現するののかという点であった。カルテス前大統領は、自身の派閥の候補として、前回選挙に続き、カルテス政権下で財相だったペニャ候補を擁立した。昨年（2022年）12月に行われた予備選挙では、アブド派として大統領候補に立候補していたウインス候補（前公共事業相）を抑え、ペニャ候補がコロラド党擁立候補として選出された。同予備選挙に際しては、コロラド党の党首選も実施され、カルテス前大統領がアブド大統領を大差（約10ポイント差）で下し（本年1月初旬にコロ

ラド党党首に就任）、大統領候補・党首ともにカルテス派が勝利を収める結果となった。



写真1：大統領選挙での勝利宣言の様子。写真中央＝ペニャ次期大統領、その左＝カルテス前大統領（現コロラド党党首）  
（出所：ペニャ次期大統領公式HP）



写真2：選挙演説の様子（出所：同上）

## 米国の汚職対策の影響

今回の大統領選挙には、汚職との闘いを掲げる米国の措置が影響を及ぼした。昨年7月、米国政府は、カルテス前大統領に対して重大な汚職関与認定を行う旨を発表し、これによりカルテス前大統領は米国への入国を禁じられた。続く8月には、ベラスケス副大統領に対しても同認定を行い、同氏は党内予備選挙への大統領候補立候補を取り下げることとなった。その結果、アブド派からはウインス候補が公共事業大臣を辞して擁立されたが、同氏は選挙活動期間が短い状態で予備選挙に臨むこととなった。

予備選挙でカルテス派が大きな勝利を取め、カルテス前大統領がコロラド党党首に就任した後の1月、米国はカルテス前大統領及び同氏の関連会社4社とベラスケス副大統領に対して、米国での資産取引を

凍結する金融制裁を発表した。これにより、コロラド党党首のみが実施できる同党の融資申請を金融機関に受け付けてもらうことが難航し、選挙運動資金不足が取りざたされたほか、カルテス前大統領は、自身が有する企業グループの企業（報道によれば企業数は70にのぼると見られる）を手放すことになった。

## 選挙結果

金融制裁の資金面での影響及びアブド派が最後までペニャ候補を積極的に応援する姿勢を示さなかったことによるコロラド党支持層の票の取りこぼしの可能性、長年の与党支配及び汚職への反発に起因する政権交代への期待によるアレグレ野党連合候補の追い上げ・逆転の可能性も取りざたされる中、選挙当日の4月30日を迎えた。欧州連合（EU）及び米州機構（OAS）選挙監視団に見守られ、選挙プロセスは全体的に平和裏かつスムーズに実施され、蓋を開ければコロラド党が圧勝を取めた。大統領選挙でペニャ・コロラド党候補が勝利したことに加え、コロラド党は上院及び下院でも議席数を伸ばし単独過半数を達成（上院は全45議席のうち17から23議席、下院は全80議席のうち42から48議席に伸ばした）、県知事選挙でも17県中15県を制すなど、組織力の高さに裏打ちされた選挙での強さを見せつけるかたちとなった。

### 大統領選挙結果

投票総数	3,022,946 票 (投票率: 63.24%)
サンティアゴ・ペニャ コロラド党候補	42.74% (1,291,209票)
エフライン・アレグレ 野党連合候補	27.48% (830,302票)
パラグアジョ・クーバス 改革運動党候補	22.92% (692,429票)

(出所：最高選挙裁判所)

一方、ペニャ候補と接戦と見られていたアレグレ候補は得票率27.48%と奮わず、第3候補であるクーバス氏が得票率22.91%と躍進し、アレグレ候補に4.57ポイント差と迫った。野党候補の統一が叶わず票割れを起こしたに加え、野党連合候補として出馬したアレグレ候補は既に3回目の大統領選出馬で新味がなく改革者と見なされなかったこと、野党連合が統一的な方向性を打ち出せなかったことが票の伸び悩みの原因と考えられる。一方、ペニャ候補は、予備選挙にも参加した約120万のコロラド党支持層の票固めに注力した結果、勝利を取めた。米国の制

裁等が逆にコロラド党支持者の結束を高めたとの見方もある。

選挙期間中、過激な発言が物議を醸したクーバス候補が20%を超える得票を記録したことはパラグアイ国民にも驚きをもって受け止められた。選挙後、クーバス氏はSNSで支持者に呼びかけ、選挙結果を不服としてパラグアイ各地でデモを行った。アナーキズムを標榜し、過激な思想で知られるクーバス候補（2019年に他の上院議員と議場で乱闘となり議員資格をなく脱されたことでも知られる）がパラグアイ国内でこれほど支持を広げたことは、伝統的な政治及び現状に強い不満を持つ層が無視できない数存在することの証左であり、安定の裏返しで保守的といわれる政治傾向と対極をなす動きとして、今後の動向が注目される。

## ペニャ次期大統領の横顔

1978年生まれの44歳。エコノミストとしてキャリアを築き、パラグアイ中央銀行理事（2013～2014年）、カルテス政権下で財務大臣を務めた（2015～2017年）。米州開発銀行（IDB）への日本の拠出金による日本奨学金プログラムを通じ、米国コロンビア大学ニューヨーク校にて公共政策を学んだことへの謝意を公言している。



写真3：ペニャ次期大統領（出所：ペニャ次期大統領公式HP）

## 台湾・中国との関係

また、大統領選挙で国外から注目を集めたのが、パラグアイの台湾・中国関係であった。パラグアイは、1957年の外交関係樹立以降、66年にわたり一貫して台湾と外交関係を有しており、南米唯一の台湾承認国である。今回の選挙においては、2023年初旬、アレグレ野党連合候補が米国ロイター紙のインタビューにて中国との国交樹立を示唆する発言をしたことで、国際社会からは台湾関係継続のペニャ候

補か、中国との国交樹立を示唆するアレグレ候補か、という対立軸で今回の選挙が捉えられることとなった。同発言の背景には、中国市場への進出が進んでいないことへの不満を従前より公にしている畜産業界の支持票取り付け、中国からの投資への期待が背景にあると考えられる。選挙直前となる3月末にホンジュラスが台湾との断交及び中国との国交樹立を発表したことも手伝い、今後のパラグアイの対台中外交姿勢について、日本のメディアでも大きく注目される選挙となった。ただし、外交関係に関する一般国民の関心は必ずしも高いとはいえず、選挙結果を左右するような重大な争点ではなかった点は見誤らないことが必要である。

台湾、米国及びイスラエルを戦略的三角形として重視するペニャ候補は、台湾との友好関係維持を公言しており、5月3日には蔡英文総統と電話会談、5月17日には愈大ライ・台湾外交部次長（元駐パラグアイ大使）のパラグアイ訪問に際して表敬を受けるなど、既にハイレベルで二国間関係強化に向けた意思が確認されている。就任前のペニャ次期大統領訪台の可能性も取りざたされている（6月14日時点）。

### 林外務大臣訪問

4月30日の総選挙直後となる5月5日、林外務大臣は中南米5か国訪問の締めくくりにパラグアイを訪問した。アリオラ外務大臣と二国間会談を行ったほか、ペニャ次期大統領を表敬した（アブド大統領はチャールズ英国王戴冠式出席のため不在）。当該訪問は、次期大統領が初めて迎える海外からの要人訪問となったとの意義もさることながら、法の支配に基づく国際秩序が危機に直面する中、G7広島サミットでの議論に反映させることも前提に、基本的価値を共有するパラグアイとの協力関係を二国間関係の文脈のみならず、自由で開かれたインド太平洋（FOIP）を含めた国際場裏での文脈でも再確認したこととともに、ペニャ次期大統領との関係が大統領当選直後に構築されたという外交的成果を強調したい。これらは両国のメディアで大きく報じられた。

なお、パラグアイは中南米の中でも極めて親日的な国であり、約1万人にのぼると見られる日系人は、その美德とともに、パラグアイの発展に貢献したことで官民から広く信頼と尊敬を得ている。これは、2019年に100周年を迎えた長きにわたる外交関係、60年以上の実績がある政府開発援助（ODA）と

も併せ、二国間の歴史的な強い絆の土台となっている。また、パラグアイは、アジア市場への進出を睨み、近年、両大洋間回廊の建設を強力に推進し、アリオラ外相は、FOIPを補完するものとしてこれを位置づけたことは特筆される。

（林大臣の訪問については本号「時事解説」p.37～38もご参照ください。）

### 対メルコスール関係

5月16日、ペニャ次期大統領は、大統領選挙後初の外遊先としてブラジルを訪問、ルーラ大統領及びヴィエイラ外相とそれぞれ会談し、パラグアイにとり最重要国であるブラジルとの関係強化が確認された。

5月29日には選挙後2回目となる外遊でアルゼンチン及びウルグアイを訪問し、フェルナンデス・アルゼンチン大統領及びラカジェ・ポウ・ウルグアイ大統領とそれぞれ会談し、メルコスール諸国重視及び域内経済統合推進の姿勢を打ち出している。メルコスール域内の経済統合の深化に加えて、対EUとの協定の早期締結、中国との協定交渉など、国際社会に対するメルコスール加盟国としての立ち位置についても関心が集まる。

### 政権移行期間

4月30日の総選挙結果を受けて、7月1日に新議会（上下院）が発足し、8月15日に新大統領が正式に就任する。大統領選挙以降、アブド現政権とペニャ次期大統領政権以降チームの間で各種調整が進められており、新政権閣僚についても既に複数のポストで名前が挙がりはじめている。

### 今後の展望

上下両院で過半数を獲得したコロラド党であるが、前途洋々とは言い切れない。次期政権に限ったことではないが、コロラド党内での派閥間争い（特にカルテス前大統領派とそれに対抗する派閥の対立）は続いていくことが予想され、自己の強い政治基盤を持たないペニャ政権の議会運営は、自身の経済的な知見を活かし、雇用創出（選挙公約にて、50万の新たな雇用創出を約束）、高い成長率の実現など、経済面での成果を残すことができるかが鍵となる。

その際、カルテス・コロラド党党首の手腕にどこまで頼るかも注目される。新政権の閣僚選出に際してカルテス前大統領の意向がどの程度反映されるか

もこれを占うものとなろう。米国が、カルテス前大統領に対して金融制裁に続く措置を行うのか、例えば、犯罪人引渡請求を行えば、カルテス派は弱体化するのか、ペニャ政権に如何なる影響が及ぶのかが大きな関心事項となっている。実際、5月中旬、米国司法省の犯罪人引渡請求専門チームがパラグアイを訪問し、ロン検事総長らと面会したことが様々な憶測を呼んでいる。

中国、台湾関係について、ペニャ次期大統領は台湾との関係重視を明確に打ち出す一方、経済関係における中国の重要性についても度々発言している。対中貿易額ではパラグアイ側の大幅な貿易赤字が続いており、中国マーケット開拓につながる動きを起こせるのか、エコノミストとしてのペニャ次期大統領の手腕が問われる。台湾は引き続き幅広い分野で協力プロジェクトを実施することが見込まれ、パラグアイの牛肉及び豚肉の輸出拡大に向けた動きも進んでいくものと考えられる。

親日国パラグアイの次期政権と、両国の更なる関

係強化のために協働し、法の支配に基づく国際秩序の維持・強化のために協力していただけることを願っている。

(本稿は筆者の個人的見解であり、外務省の立場を代表するものではない。)

(すずき さおり 在パラグアイ日本国大使館 三等書記官)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『北関東の異界 エスニック国道354号線 — 絶品メシとリアル日本』

室橋 裕和 新潮社

2023年3月 284頁 1,600円+税 ISBN978-4-10-354981-9

群馬県高崎市から北関東を利根川沿いに横断して霞ヶ浦の北を通り九十九里浜の鉾田市に出る全長172kmの国道354号線の沿線には、工場団地や輸出中古車の集散地、農園が散在し、そこで働く外国人が多いことから、彼らを対象とするエスニック食堂・食品店が多く点在する。ベトナム、タイからパキスタンなどのアジア諸国人の集住地とともに伊勢崎市にはボリビア料理店があり、同市若葉町にはペルー料理の“El Kero”があって店主の得意料理がロモサルタードであること、ペルー人が集まった経緯等を聞き出している(P.27～32)。太田市、大泉町にはすばる、三洋電機(現パナソニック)等の工場があり、ブラジル食材店、日本最古のブラジル料理店「レストラン・ブラジル」、そしてブラジル食材の大型スーパーマーケット“TAKARA”「キオスキ・シブラジル」が並び、昼には近隣の工場で働く南米人がレストラン「パウリスタ」に集まる外国人集住地となっていて、大泉町の観光協会には名物事務局長や日系ブラジル人や日本生まれの移民の子がブラジル人の就業や生活の支援を行い、日本人社会との共生に努めている(P.39～81)。

国道354号線沿いに展開する外国人の「異界」を訪ねることで、隣り合った生活者であるのに互いに目に留まらない現実を紹介し、日本人と外国人とが存在を認め合い、ごく普通の隣人になる日は来るのだろうかかと結んでいる。

(桜井 敏浩)